



Walk with Children

めぐろ



せいび

176号
2022年1月

あなたがたは自分のために、天に宝を積みなさい…

あなたの宝のある所に、あなたの心もあるからである。

(マタイ6章20-21節)

校長 シスター 小島 理恵

2022年の幕開けです。今年はどんな年になるのでしょうか。コロナ禍にある生活がいつまで続くのか分かりませんが、子ども達にとって有意義な一年となりますよう、お祈りいたします。

さて、1月は本校にとって恵みの月とも言えます。それは、ドン・ボスコとラウラ・ヴィクターニャの記念日があるからです。ラウラ・ヴィクターニャについて少しご紹介します。1891年チリのサンティアゴで生まれました。しかし、父が急逝したためアルゼンチンに移住することになります。その後、目黒星美と同じくサレジアン・シスターズの学校で勉強しますが、たいへん苦勞の多い少女時代を過ごします。しかし、ラウラはいつも周りの人に親切で、やさしく思いやりのある子どもでした。また、祈ること、誰かのために自分の力を惜しみなく使うことも忘れませんでした。そして病気によりわずか14歳で天に召されました。

本校の子ども達にとって、清い心で生活したラウラの生き方はよき模範となります。

コネクション
Conessione

～つながり～

今月は、ドン・ボスコの祝日があります。今回はドン・ボスコが大切に「オラトリオ」(ラテン語で「祈りの場」を意味する言葉)について紹介します。

1841年12月8日無原罪の聖母の祝日に、ドン・ボスコはアシジの聖フランシスコ教会で、バルトロメオ・ガレツリという少年に出会います。その後、あっという間に数百人が集まる勤勞少年の集団ができました。そこで、ドン・ボスコは毎日曜日、彼らのためにミサを捧げ、よくわかる聖書の話をし、正しく生きることを教え、悩みを聞き、一緒に遊び、楽しい一日を過ごすようになります。この活動がいわゆる「オラトリオ」の始まりとされています。

しばらくは活動場所が定まらず、移動オラトリオの時期が続きます。しかし、1846年にとうとう留まる場所を見つけました。それが現在聖堂になっているピナルディの家でした。

1月31日は、ドン・ボスコのお祝いがあります。創立者であるドン・ボスコの生き方に少しでも近づけるようお祈りします。



生活科の学習で、校内郵便局を行いました。子ども達は、ポストや郵便受け、はがきの準備などを行い、互いに力を合わせれば学校みんなのためになるということ、そして与えられた仕事を最後まで行うことの大切さを学びました。

2年生

ぼくは、校内ゆうびんきょくをしました。しごとの中で心にのこっていることは、回しゅうとけいんのしごとです。なぜかという、回しゅうはポストの中にあるはがきをぜんぶ教室にはこんでくるからです。その後、1まいずつけいんをおすので、いそがしくて大へんでした。校内ゆうびんきょくをやってみて、いつもこななおしごとをしてきているんだなと、ゆうびんきょくの人の大へんさがわかりました。みんなとできた校内ゆうびんきょくは、しごとから学んだことがたくさんあって楽しかったです。

来年の2年生にもがんばってもらいたいです。



2年生

校内ゆうびんきょくのさいしょのおしごとは、かいしゅうとけいんでした。けいんをおして、しわけがかりの友だちにわたすと、「けいんをおすところが、じゅうしょと切手の間にあって、じゅうしょが見やすいね。」とほめられました。ぼくはうれしくなり、「もっとがんばるぞ。」と思いました。お手紙を書いて、「お手紙っていいな。」と思いました。どうしてかという、本当の気持ちをつたえられるからです。これからいろいろな人にお手紙をおくりたいです。

2年生

校内ゆうびんきょくをやってみて一番大へんだとかんじたことは、じゅんびです。わたしはゆうびんうけを作りました。ゆうびんうけがかんせいしたあと、ゆうびんうけのティッシュばこが見えているところをうめるのが、一番大へんだとかんじました。はいたつのしごとで、〇年〇組がはがきに書いていない時に、お友だちが、「ゆうびん番号をみたらわかるよ。」と教えてくれました。その時に友だちに「ありがとう。」を言うのをわすれないように気をつけました。





クリスマスの集い 3年生

12月17日

全校児童や家族にクリスマスの本当の意味を伝え、イエス様への感謝と賛美を捧げる聖劇を3年生が行いました。ハンドベルの演奏、ナレーション、合唱やリコーダーの演奏など、一人ひとりが自分の役を一生懸命に果たすことができました。



3年生

私は、ナレーター役です。ナレーターは、一つひとつの場面において、その場面の内容を説明する役です。私は第6場に出る最後から2番目のナレーターでした。リハーサルの時、友達が演じている場面を見ている時は、ほとんどきん張していませんでした。でも、「来たれ友よ」が終わった時から、きん張してしまいました。セリフをちゃんとと言えるか、立ち位置は大丈夫かななどの思いがきん張になったのです。友達の顔がクリスマスツリーにかくれていないかが一番心配でした。

聖劇当日。私は朝からどきどきしていました。やっぱりリハーサルの時のきん張が戻ってきたのです。「サイレントナイト」の時は、とてもどきどきしました。でも、みんなが楽しそうに演技していたので、私もいつも通りにセリフを言えばいいという思いで行いました。自分が舞台の上に来た時、少し待ってしまいました。でもその後、とても大きな声を出すことができました。そして聖劇の次の日。仲の良い6年生に、「完ぺきだったよ。」と言われました。私はとても心が温かくなりました。自分が練習した成果をはっきりできたということが分かったからです。

人生の中にはたくさんの最初で最後があります。でも、その一つひとつの最初で最後の時間を大切にしていきたいです。

